

質 問	回答者	回答
引原先生にご質問です。研究成果の即時OAの促進について、図書館は既に学術雑誌の価格高騰問題への対応の一環として、ある程度わが事として捉えていると考えていますが、一般の研究者がどの程度認識しているか疑義があります。今後個々の研究者に「わが事」として捉えてもらうためには、今後どのような働きかけが必要とお考えでしょうか？	引原 隆士 (京都大学)	各大学の研究戦略の中でオープンアクセスを捉えることは必須ですが、その際に研究担当の理事の個人的な理解でのみ進められるという矛盾が生じます。今回の国の指針を大学としてどのように受けるかという議論を、大学の全学の会議の場で明確にしておく必要があると思います。その議論をサポートするのが図書館であり、情報セクターであり、研究推進です。図書館が雑誌価格の問題として持ち出した時点で、本末転倒になると考えます。
引原先生、竹内先生に質問です。 即時OA化対応について、大学執行部への説明・説得に苦慮しています。副学長等のお立場から、どのような体制（図書館・研究推進・情報基盤）をとればいいか、どのようにボトムアップで説明していけば響いてくるのか、アドバイスいただけますと幸いです。	引原 隆士 (京都大学)	上にも書きましたが、図書館という一部署が大学全体の方針を決める体制が取れる大学は少ないと思います。本問題を、ステークホルダーの会議全体の趣上に上げ、それに対して大学としてどのような体制を取るかという議論がなされる必要があります。それがない場合は、単に言われたからやっているだけの作業になり、研究者の姿勢が本質的に変わることはありません。場・時間を惜しまず実施し、大学間で連携して進めるべきと考えます。私共もそのようにしています。
	竹内 比呂也 (千葉大学)	当日も発言しましたが。学術研究成果のオープン化というのは図書館がその理念を実現するという点からも重要ですので当然図書館として関与すべきことです。しかし今回の義務化の基本方針を見ればわかるように、これまでのオープンアクセスの理念とは異なる考え方が入ってきています。ですので、図書館だけが旗を振ること自体に無理があります。ご指摘のように図書館、研究推進、情報基盤がそれぞれの役割を認識しながら、所属する研究者のために何をするのがベストかという観点で協力する体制の構築ができなければ、ボトムアップで大学を動かすことはできないと思います。その際の最初のリーダーシップ（ディレクションの共有に向けた議論を先導すること）は図書館（長）が取る必要があるかもしれないと思いますが、それはそれぞれの大学の事情によると思います。
竹内先生に質問です。ライブラリスキーマという言葉がなかなか理解できません、何か事例等ありましたら、ご教示願います。本学も図書館のあり方、将来像が経営陣から問われており、デジタルライブラリーなど使えるかと考えています。	竹内 比呂也 (千葉大学)	ライブラリスキーマについては、すでに個人で検討して論文を公開された方もあり、また図書館のコミュニティでもセミナーが開催され図書館での具体的な検討結果が公表されています。それらをご覧いただければと思います。ライブラリスキーマの記述の方法は一つではなく、さまざまな形がありえます。また、ライブラリスキーマの記述をするとしても、それはあくまでの現時点での図書館機能を描いているに過ぎず、スキーマを記述したからと言ってこれで図書館機能が固定されるわけではないということに留意してください。
野末先生へ。利用者ごとにニーズが多様であることが明らかであるとする、データを公開するといっても、どのように公開するかを予想することは実質的に不可能なのではないでしょうか。そうであるとすれば、データを作成し、特定の目的に利用した研究者によるオープンデータという考え方は、絵に描いた餅にしかならないのではないのでしょうか。	野末 俊比古 (青山学院大学)	質問の意図を正確に理解しきれていないかもしれませんが…。特定の目的（あるいはニーズ）に基づいてデータの作成・公開が行われたとしても、そのデータを、想定されたのとは異なるニーズのために利用することも可能だと思います。 ただ、利用者の立場・視点からすれば、自身のニーズに合うデータを見つけることは容易でないといえますので、作成者の（想定した）ニーズ（あるいは目的）と、利用者のニーズとをマッチングさせる何らかの仕組み・仕掛けが必要となると思っています。私たちの研究チームが取り組んでいるAIによる情報探索もそのひとつだと思っています。利用者が自身のニーズを反映していると考えているキーワードで見つかる情報には限りがありますが、自身が思いつかないものであってもたぐり寄せてくれる可能性がAIにはあるからです。もちろん、万能ではありませんので、図書館のレファレンスサービスのような人的なサポートをはじめ、AI以外にも必要・有効な仕組み・仕掛けはさまざまあると思います。 なお、利用者のリテラシーを高めることで自身のニーズに合うデータを見つけていくというアプローチもありえます。ただし、私自身はセミナーでもお話ししたとおり、（とくに学問分野を超えてデータを発見していくためには）かかるアプローチに頼ることはあまり効率的ではないと感じています。
引原先生に質問です。研究ライフサイクルを一人で回せる研究者はいない、というお話がありました。機関リポジトリは大学図書館の既存サービスですが、研究ライフサイクルの「実験・計測」から「論文化」までの過程のなかで、大学図書館が支援するべき部分はありますでしょうか。	引原 隆士 (京都大学)	大学図書館の職員が、研究活動の現場を知らずにその成果物である論文やデータを議論することには限界があります。研究者が研究活動として、教育活動として、なにを求めているかという理解が必要です。これまで教育への支援をされていた大学は学生という素人を相手にしていたわけですが、プロを相手にすることへ挑まなければならないと思います。そのキーは専門性だと思います。
北本先生に質問です。知の循環におけるミッシングリンクへの対策の1つとしてMahalo Buttonをご提案されたと思いますが、ユーザーによる人力のフィードバックではなくメタデータの充実やシステムとして自動的に集計が望ましいのでしょうか。最近になって知識グラフを扱い始めたのでご教示いただけると幸いです。	北本 朝展 (国立情報学研究所)	もちろん自動的な集計は進めていくべきですし、実際に大手学術サービスはすでにAIなどを活用した自動知識グラフ構築に取り組んでいます。ただ、Mahalo Buttonに人力のフィードバックを入れたのは、生の人間から得られるフィードバックこそが嬉しいものであり、少しの手間をかけることで人間のつながりを作れないかと考えたためです。自動的に集計したデータからは、「感謝（Mahalo）」の感覚は生まれません。Mahalo Buttonを「感謝のネットワーク」と名付けた背景にはそういう理由がありました。
竹内さんへ。おそらくは「雑誌価格」というのがひっかかって、図書館が引き摺りこまれているように思われます。オープンアクセスで雑誌価格は下がりにませんと言えただけだと、これまでの20年のオープンアクセス運動を経て下がっていないのですから。	竹内 比呂也 (千葉大学)	「転換契約」と言われてきたものが学術コミュニケーションコスト負担者の真の転換をもたらすのであればそれはそれで筋の通った話だと思うのですが、少なくとも現時点ではRead and Publishモデルの導入になってしまっていることに課題があるのだと思います。
引原先生に質問です。 フェアユースに手が付けられていないというお話をいただきました。オープンアクセスについては権利保持戦略や出版権の設定などが話題となっていますが、データについてはどのような手段があるのでしょうか。（お話の意図が違うようでしたらすみません）	引原 隆士 (京都大学)	シェアデータに関しては不正競争防止法によるデータ共有された者がそれを同意なく権利化できません。それが一つの抑止効果になります。しかしながらそれは非常に弱く、データに基づくシステム等の特許等による権利化が必要な場合もあります。現時点では公開されたデータを用いた権利化は認められませんので、オープンアクセスそのものが研究のオリジナリティやプライオリティを守ることにつながります。

質 問	回答者	回答
野末先生に質問です。AIは、画像や文章の捏造など、研究活動にとって悪いものと捉えられがちだと思います。ですが先生のおっしゃる通り、うまく使えば大きな威力を発揮するものでもあると思います。図書館界は、あるいは大学はAIの利用にやや懐疑的だと感じますが、どうすればもっとAIの活用が進んでいくでしょうか。	野末 俊比古 (青山学院大学)	おっしゃるとおり、AIは有効なものだと思います。もちろん使い方によるわけですが、今後、好むと好まざるとにかかわらず、AIの利用が（私たちが気づかない場合も含めて）拡大・浸透していくことは確実ですので、「上手く」使っていくことが求められると思います。将来的には、誰もがAIを「上手く」使いこなせる環境づくりが大切だと思います（し、そうなっていくと思います）が、過渡的には、AIに対する「適切な」理解を進めることと、「有効な」使い途の具体例を積み重ねることが大事だと感じています。 前者は、いわばリテラシーのひとつとして、（AIという）技術の意義や本質を理解することです。「AIについて何をどういう順序で学ぶべきか」については、教育（学）などの分野において議論されており、今後、共有されていくと思いますが、私たちの研究チームでは、ひとまずは「AIは万能ではなく得意・不得意がある」「得意を活かして使えば人間にとっては「パートナー」となりうる」といった認識を拡げていくことが大事だと考えています。後者は、私たちの研究チームが開発した「AIを使った蔵書探索システム」など、身近なところで利用できるものが増えていけば、何が有効かという共通理解も深まっていくと考えています。
引原先生へ、OA運動は「学術情報をアカデミアの手に取り返す」ことに端を発すとありますが、現代的には、英国大学等で広がりをみせつつある、「大学による権利保持ポリシーの採択」がその動きに当たると考えて良いでしょうか？ https://sje30.github.io/rrs/rrs.html	引原 隆士 (京都大学)	それは先生のご専門の範囲だと思います。OAを運動と捉えた時点で、研究者の意思は消えています。研究者が本質的に求めるべき研究活動のありかただというのが私の考えです。
（感想） 京都大学のこちらのサイトなどを見ると、図書館とデータ運用支援基盤センターが上手く連携されているような印象を持ちました（すごいです） https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1402597	引原 隆士 (京都大学)	ありがとうございます。ユーザーである研究者が何を求めているかを追求していくことが最も大切なことと考えています。
引原先生へ。現状において、「評価機関」は雑誌の影響力指標のみで研究評価はしていません。参考にすることは認めています。	引原 隆士 (京都大学)	ありがとうございます。理解しております。その評価という言葉のバイアスが結果的に横並びの動きを生み、それをまた利用した商品が生まれるということになるのは、評価されるものとする者が予定調和に陥って考えなくなっている結果だと考えています。
野末先生に質問です。 AIを活用した蔵書探索システム使ってみました。興味深いです。これは、文献検索データベースにも反映看得出来でしょうか。そうすると、従来のリテラシー教育がどのように変わっていくのか、もう少し踏みこんで伺えとありがたいです。	野末 俊比古 (青山学院大学)	ありがとうございます。セミナー中にも回答しましたが、横浜市立図書館などで実装されているシステムは、いわゆる書誌（目録）データを学習対象としていますので、同様のデータであれば（チューニングは必要だと思いますが）適用可能です。情報リテラシーという観点からいえば、情報を入手するには、「条件に合ったレコードを抽出する」という「検索」の考え方（だけ）ではなく、「すべてのレコードに近い（とAIが判断した）ものから順に並べ替える」という「探索」の考え方を（も）理解することが必要または有効となると考えています。この考え方は、デジタルネイティブが、「（キーワードによる）検索」によってインターネット上の情報を見つけるよりも、「おすすめ」によって芽づる式に情報を入手していくことに慣れてい（て、かつ、ある意味において、その方式はキーワード検索よりも適切である）ことなどとも親和性があると考えています。関連して、セミナーの最後に発言しようと思っていたことを補足させてください。私がプレゼンにてお伝えしたかったことは、オープンアクセス化が進む時代にあつては、情報リテラシーの文脈依存性は高まっていく（はず）ということと、技術依存性は低くなっていく（べき）ということです。前者は、情報リテラシーにおいて汎用的な技能が占める割合が（少なくとも相対的に）低下することを意味しています。教育（学）的にいえば、学問分野なり教科科目なりの（いわゆる専門的）カリキュラムのなかに組み入れていく必要性が高ま（ってきてい）ると思います。後者は、新しい技術（例えば生成AI）などが出てくるたびに、いわば後追いでリテラシーの中身を変えていく（だけ）よりも、情報活用（今回のセミナーでいえば学術研究）そのものに対する知見（モデル）を発展・深化させ、本質的な部分を固めたうえで、むしろ必要な技術を創出していく（ことに関わっていく）姿勢がリテラシーとして重要ではないかと感じています。（ここでいう、本質的な部分というのは、例えばインターネットで検索すれば、論文や「論文に似たもの」（図書の一部、プレプリント、報告書など）がいくらかでも見つかり、「誰がどのようにつくったものか」を意識せずに使ってしまう現状では、メタなレベルで「雑誌論文」とは何かについて、学術コミュニケーションのなかに位置づけて理解しておくことのほうが、キーワード検索を上手く行えるスキルを磨くことよりも重要ではないか、という問いかけです。）